

若者が抱く世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語りとの関連性

堀田 美保 (近畿大学文学部)

The relationships of story-telling by parents about the past with perceived generation-gaps and images of generations held by youth

Miho HOTTA (*Department of Arts and Literature, Kinki University*)

This study was conducted to examine the relationships among (1) generation-gaps young people perceive between themselves and their parents' generation, (2) images of their parents' generation, and (3) story-telling by their parents about the past. A survey was conducted on 284 university students. The results showed that respondents experienced story-telling more from their mothers than from their fathers, and more about events in the respondents' childhood than about earlier events. Moreover, those who experienced story-telling from their mothers more frequently rated their parent's generation as having more vitality. A similar tendency was identified regarding the fathers' story-telling among female respondents. On hearing stories, respondents who felt pity tended to have images of toughness and those who felt envy and interest tended to have vitality images about their parents' generation. Finally, those who experienced story-telling from their mothers more frequently perceived smaller generation-gaps regarding some topics. In female respondents, more frequent story-telling from their fathers was related to smaller generation-gaps. Possibilities for future research on story-telling from parents and parent-child and inter-generational relationships were discussed.

Key words: generation-gap, generation image, story-telling, parent-child relationship, youth

キーワード: 世代間格差、世代イメージ、語り、親子関係、若者

問 題

本研究では、若者が親から過去についての語りを聞くことが、若者が認識する自分たちの世代と親世代との格差感および親世代イメージとどう関わっているかについて検討を加える。

世代とは、たとえば「一定期間に出生し、同じ歴史的、社会的経験を持ち、それゆえほぼ類似した精神構造と行動様式をもつ一群の同時代者」と定義される(青井, 1999)。ある人がどの世代に属するのかは出生年によって自ずから決められるもので、世代が人に及ぼす影響とは、生育した時代背景の影響だという考え方がある。たとえば、物質的に豊かな子ども時代を過ごした世代はモノに執着しない傾向にある、というような影響のとりえ方である。このような考え方は、たとえば戦中派論、「団塊の世代」論、新人類論、団塊ジュニア論などに見られ、どのような意見・考え方を保持し、どのような価値観を抱き、どのような行動特性や属性を持っているかについて、それぞれの世代は全体としてある傾向を共有していると考えられていることが多い。「今の若い世代の考えていることは分からない」「親たちの世代の言うことは古くさい」「世代間で価値観の違いを感じる」「異

なる世代とは意見の対立があるものだ」など、異世代との差異の認識、いわゆる「世代間での格差感」は頻りに表明され、世代間での格差は自明のこととして仮定されていることがしばしばある。そのような傾向は、新聞の投書欄などに見られる個人的見解から、大規模な意識調査における結果など、様々なところで伺える。

世代間格差が当然視される現象に対して、「世代間格差は現実のものか」を改めて問う研究が登場し、世代間格差という常識は疑わしいとする見解も提出された(西平, 1976; Troll & Bengtson, 1978)。その後、世代間格差の有無ではなく、格差の認知、世代間格差感そのものを問題とする研究が行われるようになった(たとえば、Acock & Bengtson, 1980, Bengtson & Kuypers, 1971; 徳田, 1978)。また、世代間格差感の基盤として、それぞれの世代に対して抱かれているイメージに焦点を当てる研究もある(たとえば、古川・秋山, 1976; Maassen & de Goede, 1992)。このような世代間格差感や世代イメージの認知に焦点をあてた研究では、誰が、異世代に対してどのようなイメージを抱いており、異世代との間にどのようなギャップを感じているのか、それは何から派生し、何故なのかが問われてきた。

まず、各世代が異世代に対して抱くイメージとはどの

ようなものなのか、特に若者世代とその親世代に関する先行研究をとりあげ、考えてみる。

社会的アイデンティティ理論は、自己が所属する「我々」カテゴリーに対しては positive な、そうではない「彼ら」カテゴリーには negative な特性が付与され、集団間の差異を強調する必要性が増すほど、外集団に対してイメージが negative になると予測する (Tajfel & Turner, 1979)。世代を社会的カテゴリーにとらえ、外集団に対する negative なイメージの保持について検討した研究に、Maassen & de Goede (1992) がある。彼らは、責任因子（「責任感のある」「粘り強い」「能力のある」）や高潔因子（「正直な」「誠実な」）は親世代について、バイタリティ欠如因子（「無感動な」「不活発な」）や利己主義因子（「わがままな」「甘やかされた」「物質主義的な」）は若者世代により当てはまるものだとされているという結果を報告している。若者世代には全般的に negative なイメージが付与されており、その傾向は特に男性の大人から男性の若者に対して顕著であった。しかし、親世代のイメージについては、若者が特に negative であるというわけではないという。Maassen & de Goede (1992) は、男性の若者に対して特に negative なイメージが抱かれる理由として、社会問題として取り上げられる暴力、アルコール、薬物、暴走などが男性の若者の問題とされるためという可能性を挙げている。

また、古川・秋山(1976)は日本人の世代観の検討を行った。その中に世代イメージに関する分析がある。若者に対して「無気力」「社会のことに無関心」というイメージを持つ人は異世代よりも若者自身に多く、「自分勝手だ」については逆に異世代により多い。中年世代に対しては、中年期にある人自身は「信念を持っている」「意欲的である」「社会に強い関心を持っている」と positive なイメージを抱いている人が多く、同じ傾向が異世代でも見られた。

古川・秋山(1976)の分析は自世代と異世代という対比であるため、中年に対する異世代には若者だけではなく老年も含まれている。したがって、若者が抱く中年イメージと老年が抱く中年イメージが混在していることに留意しておく必要があるが、以上の結果からは、若者世代とその親世代では、異世代であるからといって単純に negative なイメージが抱かれているわけではないと思われる。若者は親世代に対して、社会人としての責任感、活動性の高さといった部分で肯定的なイメージを抱いているようである。ただし、現在、古川・秋山(1976)からは四半世紀を経ている。また、Maassen & de Goede (1992) はオランダ社会での研究である。このような若者による肯定的な親世代イメージが、現在の私たちの社会でも存在するのかについては、検討を要する。

次に、「誰が世代間格差を感じるのか」に関してだが、研究知見では格差感が顕著であるのは「下から上に対して」であるとする見解が優勢である (Bengtson & Kuypers, 1971; 徳田, 1978, Tompson, Clark, & Gunn, 1985)。特に、若者は自己確立を試みているため、上の世代との間での格差の認知が顕著であるとされる。実際に、若者が自己形成のために最も苦闘する時期を過ぎ中年期に入ると、格差感は低減するという報告もある (Lynott & Roberts, 1997)。世代間格差感が若者でより顕著である理由として、若い世代は成長の過程で、親の規範や価値観に基づいて「育てられた自己」から「本当の自分自身」に脱皮するために、親世代を批判する必要がある、世代間で格差を認知することが必要となる (青井, 1999; Bengtson & Kuypers, 1971)、と説明される。格差感は若者世代の自己形成にとって重要な役割を果たすと考えられているのである。

上述のように、若者における世代間格差認知が顕著であるとして、そもそもそれは何に基づいているのだろうか。若者が抱く親世代イメージが必ずしも negative ではないという先述の研究結果を考えてみても、自己確立のための親世代批判の必要性ということからのみ世代間格差感が抱かれているとは考えにくい。たとえ過大評価やバイアスが含まれるとしても、やはり何らかの情報に基づいた判断であろう。世代間の相違は、生物学的発達による相違 (年齢効果) と歴史的変化による相違 (時代効果) が混在して判断されると考えられる (Figure 1)。前者は、今という時間で「若者期」と「中年期」にある者では年齢が異なり、さらに年齢に応じた役割や価値観において異なるために感じられるものである。家庭、職場、地域などで責任のある地位を占めていることが多い中年世代と、まだそのような地位にない若者世代とは価値観や行動様式が異なると考えられる場合である。後者の時代効果とは、たとえば「若者期」を過ごした時期の社会情勢や歴史的出来事によって判断される相違である。冒頭で述べたように、たとえば「団塊の世代」「新人類」として考察される場合には、この時代効果に重点が置かれていると言える。

若者では、世代を比較する場合には年齢効果よりも時代効果が考慮されていることを示唆する調査結果がある。堀田(1999)によると、学生とその保護者を対象に、それぞれの世代の損得について尋ねたところ、学生が親世代について示した記述では、「戦争があった」「物がなく、不便であった」「何かと規範に縛られていた」など過去におけるデメリットに関するものが7割あり、自己の世代については「平和な時代」「豊かな社会」「自由度が高い」など、現在自分たちが享受しているメリットについての記述が8割あり、両者とも保護者に比べてかなり多いという。また、学生が親世代について述べた場合、

堀田：若者の世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語り

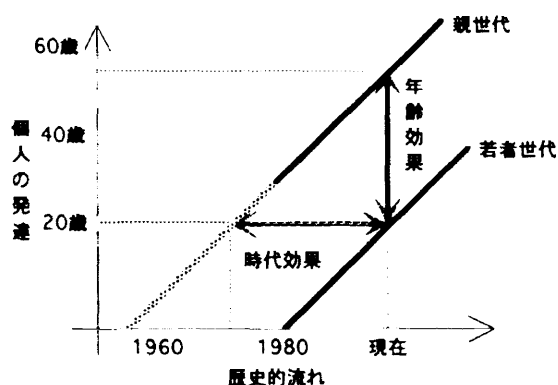


Figure 1 世代間格差感の2つのソース：年齢効果と時代効果（青井，1999を一部改変）

現在の状況に言及していた者はわずか1割未満であった。つまり、学生による世代比較では、今の若者世代としての自分たちと昔の若者としての親世代との比較、つまり、上述の時代効果への言及がより多かったのである。

このように親世代を過去に平行移動させて現在の自己世代と比較するためには、親世代が経験した時間のある部分、たとえば Figure 1 で親世代のライフコースの点線部にあたる、若者が生まれる以前の時間は、若者にとっては経験のないものである。それらについては何らかの外部情報から推測するしかない。そのような情報源としては、過去に関する報道や書物などマスメディアと、親あるいは他の大人との対人的コミュニケーションによるものと大別できるだろう。本研究では、2つの情報源のうち後者、特に親による過去についての語り

に焦点を当てる。では、若者が親から過去についての語りを聞いた経験と、彼らが抱く世代間格差感、世代イメージとの関連はどのようなものであると考えられるだろうか。

親が子どもに過去を語るという現象そのものを扱った先行研究は見当たらない。したがって、まず、親による過去の語りがあるのか、聞き手である若者はそれをどう受け止めているのかなど、語りの実態を把握する必要がある。本研究では、この点についても詳しく分析を加えることとした。よって、現段階では、語りと世代間格差感・世代イメージとの関連性についても探索的にならざるを得ない。ここで検証のための仮説というものは明示できないが、分析の焦点を呈示しておく。

過去についての語りでは、親は「若者」として現れる。たとえば、親が恋愛経験や遊びなど自らの若い時代について語ることで、若者は現在自らが経験していることとの類似性を感じ、格差感が薄らぐということがあってもいい。語りの内容が現在の若者自身の関心事と重なっているときに、より影響力は大きいのではないかと考える。また、親が過去について語る時、若者が抱く

親世代イメージに語りがあるような影響を与えるかは、1つには、語りを聞いた感想に依存するであろう。親による語りがあるならば、その頻度が高いほど、若者が親世代に対して抱くイメージはより好ましいものとなる。本研究では、親からの語りの頻度だけではなく、その内容や感想などと格差感・親世代イメージとの関連性も検討に加えることとした。

ここで、世代間格差の認知に関して、性差の問題について触れておきたい。男性に比べると、女性において世代間格差感全般に比べて小さいとする調査結果がある（たとえば Lynott & Roberts, 1997）。その理由については、たとえば、父と娘あるいは息子、母と息子、母と娘という順で関係の緊密性が高いためであり、それは女性が情緒的・経済的に家族との親密な関係、高い絆感・団結感を必要としているからである（Rossi & Rossi, 1990）、あるいは、女性はケアの担い手であると同時にケアの受け手でもあり、娘から母、母から娘という双方向で世代間での援助への依存度が高く、相互報酬的であるからだと説明される（Bromberg, 1983; Lynott & Roberts, 1997）。しかし、たとえば仕事・家事・育児のバランスという問題については、逆に、男性よりも女性の方が世代間で意見が異なると感じる度合いはより大きいという結果もあり（堀田，2000）、どのような問題領域での格差感が問われているのかに依存して、性差の有無・程度やその方向は異なると考えられる。また、親子間に限らず、コミュニケーションの頻度、内容、機能については性役割に合致する方向で差異があるという研究は数多い（たとえば Coates, 1986）。以上のことから、親および子の性別は、語りの状況あるいはその話題によっては世代間格差感に影響を及ぼしている可能性が高いと予想できるため、本研究ではそれらを一要因として分析に組み入れることとする。

以上、本研究における分析の焦点をまとめると、(1) 若者はどのような事柄に関して、どの程度親による過去の語りを聞いており、またその感想はどのようなものか、そして、(2) そのような親からの語りを聞くという経験が若者が抱く親世代イメージや親世代との格差感と関連があるのか、あるとすればどのようなものであるのかという点である。

方法

調査対象者および手続き 集団実施方式で質問紙調査を行った。調査対象者は4年制私立大学の学生、女子148名と男子136名であった。調査時の回答者の平均年齢は20.7歳 ($SD=0.9$) であった¹⁾。

- 1) 回答者に保護者の年齢を尋ねたところ、平均年齢は父親51.6歳 ($SD=5.5$)、母親48.8歳 ($SD=3.0$) であった。

調査項目²⁾

親から語りを聞いた経験：若者が親による過去についての語りを聞いた経験がどの程度あり、それがどのような話題であり、それについてどのような感想を抱いたのかを把握するために、以下の質問を設定した。まず、母親、父親のそれぞれから昔の話を聞いたことがあるか、語りの頻度について尋ねた。親が幼かった頃（幼少期）、回答者が生まれる以前親が若かった頃（若者期）、回答者が生まれ親となってから（親期）のそれぞれについて4段階（「全く聞いたことがない(1)」「余り聞いたことがない(2)」「たまに聞いたことがある(3)」「よく聞いたことがある(4)」）で頻度評定を求めた。

次に、家族、友達関係など、7つの話題（Figure 2参照）各々についての昔の話を母親・父親から聞いたことがあるか、上述の4段階で回答するよう求めた。その際、差し支えない範囲で、各話題ごとに一例を簡単に記述するよう求めた。

さらに、その話の感想として、「驚いた・意外に思った」「尊敬した・見直した」「羨ましかった」「かわいそうだと思った」「たいへんだったと思った」「おもしろかった」「うとうしかった」「軽蔑した」「がっかりした」「自分たちとは違うと思った」「自分たちと同じだと思った」「参考になった」「その他」の13項目から、当てはまるものをいくつでも選択するよう求めた。

世代イメージ：若者が親たちと自分たちの世代について抱いているイメージを測定するために、16の形容詞対を呈示し（Table 3参照）、親世代と若者世代について5段階で評定するよう求めた。

世代間格差感：家族、友達関係など、10項目（Table 4参照）の各々について、親世代と若者世代との間で考え方が異なると思うか、4段階評定（「全く違いはないと思う(1)」「余り違いはないと思う(2)」「少し違うと思う(3)」「全く違うと思う(4)」）を求めた。また、どんなことで違うと思うのか、具体的に記述するよう求めた。

結 果

親から子への語り まず、母親・父親からの語りの頻度に関する評定の平均を Table 1 に示す。評定値に対して回答者の性別(2)×親の性別(2)×語られた時期(3)の分散分析を行った結果、親の性別×語られた時期の交互

- 2) 本調査で用いられた質問項目のうち、語りの話題、格差感評定項目については、過去についての語り及ぶであろう多様な領域を含むように配慮して、独自に作成したものである。語りの感想項目については、5名の学生に行った予備的な聞き取りによって得られた感想を参考に作成した。世代イメージ測定の形容詞対は、Maassen & de Goede (1992) など、世代に関する先行研究を参考に選定した。

作用が有意で ($F(2, 560)=33.06, p<.001$)、母親からの語りの頻度は、親期が最も高く、若者期、幼少期と順に低くなり ($\alpha=.008$ で Fisher's PLSD=.13)、父親では幼少期に比べて親期と若者期についての語りの頻度が高い ($\alpha=.008$ で Fisher's PLSD=.15)。全ての時期において父親よりも母親からの語りの頻度が高い（幼少期から順に $F(1, 281)=33.60, 34.16, 192.56, p<.001$ ）。以上、全体として父親よりも母親による語りが多く、特に回答者が生まれてからの親時代についての語りが多い。

次に、親からの語りの頻度を話題別に見てみる。評定平均値を Figure 2 に示す。評定値に対して回答者の性別(2)×親の性別(2)×語りの話題(7)の分散分析を行った。回答者の性別×親の性別の交互作用が有意であった ($F(1, 268)=12.21, p<.001$)。母親からの語りは男子よ

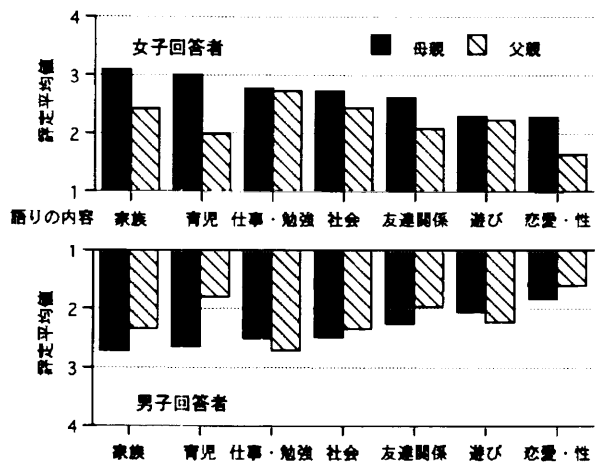
Table 1 親からの語りの頻度の評定：平均値と相互相関

回答者	平均			相互相関(r)		
	幼少期	若者期	親期	幼少期と若者期	幼少期と親期	若者期と親期
母親から						
女子	2.7(0.9)	3.0(0.8)	3.5(0.6)	.58	.37	.44
男子	2.6(0.9)	2.8(0.8)	3.3(0.8)	.54	.43	.53
父親から						
女子	2.3(1.0)	2.6(1.0)	2.6(1.0)	.62	.48	.60
男子	2.3(0.9)	2.5(1.0)	2.5(1.0)	.48	.42	.37

注1) 「全く聞いたことがない(1)」から「よく聞いたことがある(4)」までの4段階評定

注2) 括弧内はSD

注3) 相関係数はすべて $p<.001$ で有意



注1) 「全く聞いたことがない(1)」から「よく聞いたことがある(4)」までの4段階評定

Figure 2 親からの語りの頻度評定：話題別平均値

堀田：若者の世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語り

Table 2 親からの語りに対する感想—各話題について上位5項目の選択者比率(%)

家族 (n=216)		育児 (n=179)		社会 (n=161)	
たいへんだったと思った	39.4	たいへんだったと思った	50.3	たいへんだったと思った	44.7
おもしろかった	34.3	おもしろかった	26.8	自分たちとは違うと思った	32.3
驚いた, 意外に思った	28.7	尊敬した, 見直した	15.1	驚いた, 意外に思った	25.5
自分たちとは違うと思った	22.7	参考になった	15.1	おもしろかった	22.4
尊敬した, 見直した	19.9	驚いた, 意外に思った	10.1	尊敬した, 見直した	19.3
友達関係 (n=147)		遊び (n=142)		恋愛・性 (n=115)	
おもしろかった	47.6	おもしろかった	50.7	おもしろかった	46.1
自分たちと同じだと思った	21.8	自分たちとは違うと思った	33.1	驚いた, 意外に思った	25.2
自分たちとは違うと思った	17.0	羨ましかった	24.6	自分たちとは違うと思った	23.5
羨ましかった	15.0	自分たちと同じだと思った	16.2	参考になった	19.1
驚いた, 意外に思った	12.9	驚いた, 意外に思った	10.6	尊敬した, 見直した	11.3
参考になった	12.9				
仕事・勉強 (n=215)					
尊敬した, 見直した	37.2				
たいへんだったと思った	24.2				
参考になった	17.7				
自分たちとは違うと思った	17.7				
驚いた, 意外に思った	16.3				

注) n は各話題において感想項目を選択した回答者の総数

りも女子回答者で平均値は高いが(それぞれ $M=2.4, 2.7, F(1, 1888)=55.98, p<.001$)、父親からの語りでは有意差はない。また、女子回答者でも、男子回答者でも、父親からよりも母親からの語りの頻度が高い(女子で $M=2.2, 2.7, F(1, 986)=198.74, p<.001$, 男子で $M=2.1, 2.4, F(1, 902)=43.36, p<.001$)。また、親の性別×話題の交互作用が有意で ($F(1, 1608)=51.15, p<.001$)、仕事・勉強や遊び以外は全て母親からの語りが多い(Figure 2 の家族から順に右へ $F(1, 276)=77.34, 237.54, 22.55, 42.08, 53.39, p<.001$)。母親では家族や育児、仕事・勉強や社会、友達関係、遊び、恋愛・性の順で ($\alpha=.001$ で Fisher's PLSD=.21)、父親では仕事・勉強、社会や家族、遊び、友達関係、育児、恋愛・性の順で頻度が低くなる ($\alpha=.001$ で Fisher's PLSD=.20)。

各話題について例を挙げるように求めたが、その話を聞いたときどのように思ったか、その感想として選択された項目について分析した。回答者の性別によって選択率に差が見られなかったため、男女をまとめ、各話題について被選択率の高い感想項目5つについて、各項目を選択した者の比率(%)を Table 2 に示した。以下、全体的な傾向について述べる。

仕事・勉強以外の話題については、「おもしろかった」という感想がどれも比較的多く、親からの語りは回答者にとって関心が持たされたようである。感想項目の被選択率

から、7つの話題は次の3パターンに大きく分類されると思われる。まず、Table 2 の最上段に示した家族、育児、社会という3つの話題に関しては、「おもしろかった」という感想が多いが、それ以上に「たいへんだったと思った」という感想が多い。育児に関しては、約半数の者が自分や兄弟姉妹を育ててくれた中でのエピソードを挙げ、それに対してこの感想項目を選択していた。家族、社会に関する語りについても、しつけの厳しさや食料に関する苦労などについて「たいへんだったと思った」という感想を選んだ者が多かった。第2に、Table 2 の中段に示した友達関係、遊び、恋愛・性など回答者自身の現在の関心事であると思われる話題では「おもしろかった」という感想が50%前後と高い比率を示している。しかし、これらについては先の家族、育児、社会とは異なり、「たいへんだったと思った」という感想は少ない。友達関係や遊びでは「羨ましかった」「自分たちと同じだと思った」という感想が他の話題に比べて多い。そして、最後に、先述のように、仕事・勉強については「おもしろかった」という感想が他の話題に比べて少なく、「たいへんだったと思った」に加え、学費を自己負担していた話、勉強に対する熱意が高かった話、学歴が無かったが努力して成功した話など、「尊敬した・見直した」という感想が多い。

以上、親からの過去についての語りは父親からよりも母親からが多く、特に、家族や育児という話題ではその

差が大きい。また、全般的に親からの語りは新しくなるほど多い。聞き手である子どもたちが幼かったときの話が多く、それ以前の話となるとその頻度は少なくなる。親からの過去についての語りは、子どもにとっては、おもしろかった、たいへんだったと思ったなどの感想が全体としては多かったが、感想は話題によって異なるパターンを示した。

語りと世代イメージ 親からの語りの経験によって、異なった世代イメージが抱かれているのかを検討した。まず、親世代イメージおよび若者世代イメージをこみにして、全ての評定値に対して因子分析を適用し、世代イメージに用いた形容詞対の分類を行った。主因子法を用いて得られた各因子の固有値、バリマックス回転後の各形容詞対の因子負荷量 (Table 3) を検討したところ、各因子の寄与率および解釈の妥当性から、3因子解が最適であると判断した。因子1では「厳しい—甘い」「質素な—ぜいたくな」など、状況の制約を乗り越えていく我慢や強さに関わる項目が並ぶ。そこでこの因子をタフネ

ス因子と命名した。因子2では、「陽気な—陰気な」など外向—内向といった形容詞対と、「元気な—無気力な」などやる気に関わる形容詞対の負荷量が高く、この因子をバイタリティ因子と命名した。最後の因子3は、「ゆったりした—せかせかした」「温かい—冷たい」などで負荷量が高く、高得点のものはくつろいだイメージを思わせる。また、「保守的—進歩的」も負荷量が高いことから、旧態を守る、変化しないあるいは遅いなどの意味合いも含まれる可能性がある。そこで、それらを含ませ、因子3をスローネス因子と命名した。本結果におけるタフネス因子やバイタリティ因子などに関しては Maassen & de Goede (1992) や古川・秋山(1976)の結果と類似した傾向であり、若者は親世代に対して必ずしも negative なイメージを抱いていないと言えるだろう。

次に、これら3つの因子得点それぞれを従属変数として、世代イメージと親からの語り頻度との関連性について分析を加えた。語られた3つの時期に関する語りの経験頻度評定間では相互に高い相関が見られたので (Table 1 参照、すべて $p < .001$)、3つの時期に対する評定の平均を求め、それを語り頻度指標とした。その上で、母親からの語りに関して、男女回答者それぞれの中で、上位25%を高頻度者、下位25%を低頻度者とした。父親からの語り頻度に関しても同様に、高・低頻度者を選び出した。

Figure 3a に母親からの語りの頻度別に算出した因子得点の平均値を示す。3つの因子得点それぞれに対して、世代(2)×回答者の性別(2)×語り頻度(2)の分散分析を行った³⁾。因子1と因子3では、世代の主効果のみが有意であった(それぞれ $F(1, 107) = 286.11, 18.12$, ともに $p < .001$)。語り頻度に関わらず、親世代は、若者世代に比べて、タフなイメージが強く、しかし一方でスローなイメージがより強いと評定された。因子2に関しては、世代×語り頻度の交互作用が有意であった ($F(1, 107) = 7.25, p < .01$)。高頻度者は、親世代と若者世代とではバイタリティイメージに関して差があると評定し ($F(1, 53) = 8.86, p < .01$)、低頻度者に比べて親世代についてバイタリティのあるイメージがより強いと評定していた ($F(1, 109) = 14.01, p < .001$)。

父親からの語りの頻度についても同様の分析を行った。頻度別因子得点の平均値を Figure 3b に示す。分散分析の結果、因子1と因子3についてはやはり世代の主効果が有意で ($F(1, 100) = 251.73, p < .001$; $4.61, p < .05$)、語り頻度に関わらず、親世代は若者世代に比べて

Table 3 世代イメージ評定の因子分析結果: 各形容詞対の因子負荷量

形容詞対	因子1	因子2	因子3	共通性
厳しい—甘い	.818	.066	-.057	.677
質素な— ぜいたくな	.781	.174	.308	.736
我慢強い— 忍耐力のない	.778	.293	.238	.748
貧しい—豊かな	.743	.036	.192	.591
力強い—か弱い	.676	.394	.178	.644
不自由な—自由な	.622	-.289	-.102	.480
陽気な—陰気な	.097	.706	.111	.520
希望のある— 希望のない	.282	.700	.011	.570
明るい—暗い	-.190	.682	.111	.513
充実した— むなしい	.257	.677	.234	.579
元気な—無気力な	.467	.642	.218	.678
面白い— つまらない	-.148	.600	-.013	.382
親しみやすい— 近寄りやすい	.270	.572	.508	.659
ゆったりした— せかせかした	.019	.225	.861	.791
温かい—冷たい	.432	.495	.517	.698
保守的な— 進歩的な	.464	-.332	.486	.562
寄与率 (%)	37.9	16.9	6.6	
累積寄与率 (%)	37.9	54.8	61.4	

注) 負荷量の絶対値が .4 以上のものを太字で示した。

3) ここで選ばれた高頻度者と低頻度者には、母親の語り
と父親の語りのそれぞれに対して、異なる者もいれば
同じ者も含まれている。したがって、分散分析の際に
親の性別を要因としては含めることができないため、
別個に分析を行った。

堀田：若者の世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語り

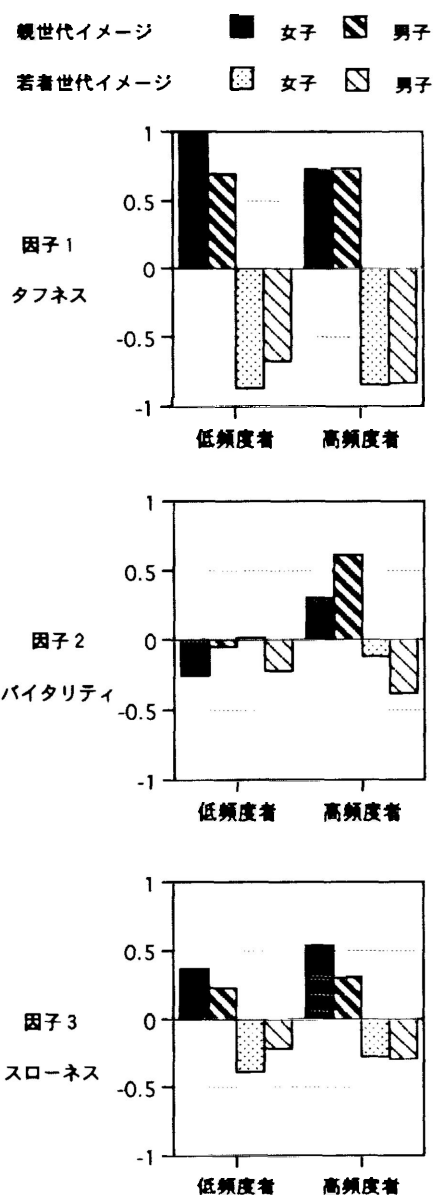


Figure 3a 母親からの語り頻度別、因子得点平均値

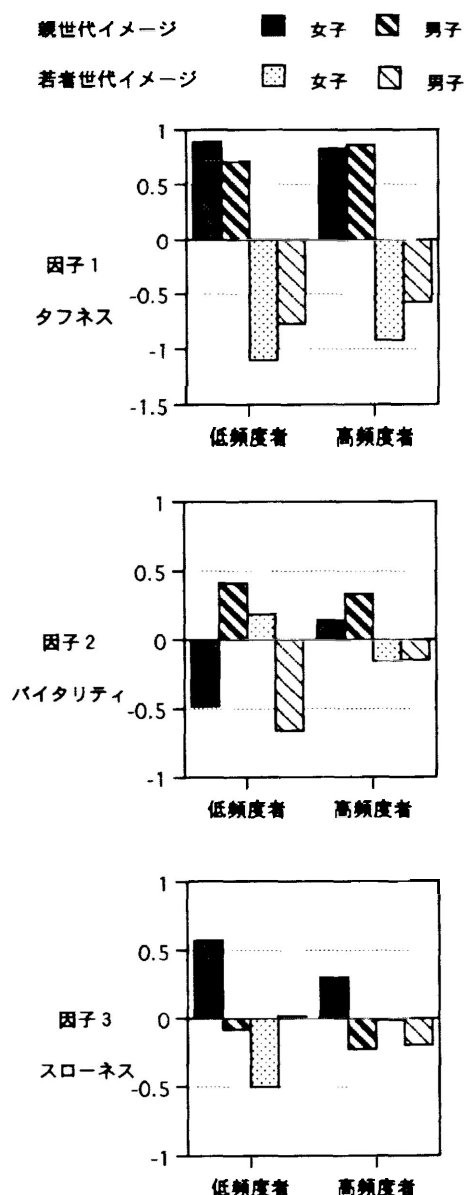


Figure 3b 父親からの語り頻度別、因子得点平均値

タフなイメージ、スローなイメージがより強いと評定された。因子2に関しては、世代×回答者の性別×語り頻度の交互作用が有意であった ($F(1, 100)=6.70, p<.05$)。男女それぞれで世代(2)×語り頻度(2)の分散分析を行った結果、男子回答者では世代の主効果が有意で ($F(1, 45)=10.97, p<.01$)、若者世代に比べて親世代はバイタリティのあるイメージがより強いと評定されていた。一方、女子では世代と語り頻度の交互作用が有意で ($F(1, 55)=6.16, p<.025$)、低頻度者は高頻度者に比べて親世代のイメージとしてはバイタリティがより低いと評定していた(頻度の単純効果が ($F(1, 55)=7.17, p<.0125$ で有意)。

次に、どのような話題についての語りイメージと関

連するのかを検討するために、各話題に関する語りの頻度評定とそれぞれの世代イメージに関する各因子得点との相関を算出した。その結果、親イメージに関するバイタリティ因子の因子得点と頻度評定との間にいくつか有意な相関が見られた。男子回答者では母親から友達関係や恋愛・性についての話をよく聞くとした者ほど、女子回答者では母親から恋愛・性や社会についての話をよく聞くとした者ほど、因子得点が高かった(男子でそれぞれ $r=.18, .17$, ともに $p<.05$ 。女子でそれぞれ $r=.21, .22$ ともに $p<.01$)。さらに、女子回答者では、友達関係、遊び、育児、社会、仕事に関して父親からの語り頻度が高いとした者ほど、因子得点は高かった(順に、 $r=.20, .24, .22, .32, p<.01; .19, p<.05$)。ただし、い

れの相関もそれほど強いとは言えない。

さらに、語りの感想とイメージとの関連について分析を行った。話題別に語りについて尋ねた際に感想項目を選択するよう求めたが、その選択数を7つの話題で合計し、それと各因子得点との間でスピアマン相関係数(r_s)を算出した。その結果、親イメージに関して、タフネス因子において、女子回答者では「かわいそうだった($r_s=.25, p<.01$)」「たいへんだったと思った($r_s=.22, p<.01$)」「違うと思った($r_s=.28, p<.001$)」、男子回答者では「かわいそうだったと思った($r_s=.18, p<.05$)」という感想を多く選択した者ほど、因子得点は高かった。また、親イメージに関して、バイタリティ因子においては、女子回答者では「尊敬した($r_s=.18, p<.05$)」「羨ましいと思った($r_s=.20, p<.05$)」「おもしろかった($r_s=.29, p<.001$)」、男子回答者では「羨ましいと思った($r_s=.20, p<.05$)」「おもしろかった($r_s=.18, p<.05$)」「たいへんだったと思った($r_s=.22, p<.01$)」という感想を多く選択した者ほど、因子得点は高かった。また、女子では「うとうしいと思った」という感想項目の選択数、男子では「軽蔑した」という感想項目の選択数と、親イメージにおけるタフネス因子の因子得点との間に正相関が見られた($r_s=.17, .18$, ともに $p<.05$)。また、女子では「うとうしいと思った」という感想項目の選択数は親イメージにおけるバイタリティ因子の因子得点と負の相関関係にあった($r_s=-.17, p<.05$)。ただし、ここでも相関は全般的に高くはない。

以上、一般的に母親からの語りの頻度が高い場合には親世代のイメージはエネルギーに満ちた明るいバイタリティのあるものとして評定された。父親からの語りの頻度と世代イメージとの関連性については女子回答者において母親の場合と同様の傾向が見られ、高頻度者は低頻度者に比べて親世代のイメージとしてはバイタリティがより強いと評定していた。また、話題別に見ると、いずれも強くはないが、いくつかの話題における語り頻度とバイタリティイメージとの間に正相関が見られた。最後に、語りを聞いた感想として「かわいそうだった」などの感想とタフな親世代イメージ、「羨ましい」「おもしろかった」などの感想とバイタリティのある親世代イメージが関連しているというケースが見られた。

語りと世代間格差感 まず、親からの語りの経験の頻度別に世代間格差感を検討した。格差感評定値の平均値をTable 4に示す。格差感評定値に対して、回答者の性別(2)×頻度(2)×項目(10)の分散分析を行った。母親からの語り頻度については、頻度×項目の交互作用が有意で($F(9, 963)=2.41, p<.01$)、結婚、遊び、友達関係で低頻度者の方が格差感が高い(順に単純効果は、 $F(1, 111)=5.03, 8.74, p<.025; 10.83, p<.001$)。父親からの語り頻度については、頻度×性別の交互作用が有意で

Table 4 語りの頻度別、世代間格差感評定:平均値

項目	母親からの語り		父親からの語り	
	低頻度者	高頻度者	低頻度者	高頻度者
性	3.2	3.1	3.4	3.2
結婚*	3.2	3.3	3.3	3.3
遊び*	3.3	2.9	3.3	2.9
恋愛	3.3	3.2	3.0	3.0
仕事	3.4	3.0	3.4	3.1
家族	3.3	2.7	3.2	3.5
生き方	3.4	3.1	3.2	3.1
礼儀	3.1	3.0	3.2	3.1
勉強	3.0	2.9	3.0	2.9
友達関係*	2.8	3.1	2.9	2.9
	2.8	2.9	2.9	2.9
	3.0	2.9	3.0	2.9
	3.0	2.6	3.0	2.5
	3.3	3.3	2.8	3.3
	2.8	2.8	2.7	2.8
	2.8	2.8	2.7	2.9
	2.8	2.7	2.8	2.7
	2.8	2.8	2.8	2.9
	2.8	2.3	2.9	2.3
	2.7	2.4	2.4	2.5

注1) 「全く違いはないと思う(1)」から「全く違うと思う(4)」までの4段階評定

注2) 上段は女子回答者、下段は男子回答者

注3) *は、母親からの語りにおける低頻度者と高頻度者の差が $p<.025$ で有意

あった($F(1, 99)=4.50, p<.05$)。女子回答者において低頻度者($M=3.1$)は高頻度者($M=2.8$)よりも平均して格差感がより高かったが($F(1, 575)=10.59, p<.01$)、男子では頻度による差異はない($M=2.9$ と 3.0)。

世代間ではどのような違いがあると思うかに関する具体的記述について分析を行った。記述内容から、家族、結婚、恋愛・性、仕事・勉強、金銭、遊び、友達関係、習慣、性役割、生き方、自由、道徳観、社会、嗜好という15のカテゴリーを作成し記述を分類した。具体例を記述した者のうち各カテゴリーに言及している者の比率を算出した。全体としては、女子では、男女間での力関係、家庭や社会での役割分担など性役割に関するものが多く(26.8%)、次にプラトニック性や自由度など恋愛・性について、学歴や仕事人間など仕事・勉強についての記述が続く(ともに22.5%)。男子では、生きがいや目標の明確性など生き方に関する記述が多く(29.9%)、次いで、女子と同様に、恋愛・性、仕事・勉強(ともに27.3%)であった。このうち親からの語りの低頻度者・高頻度者のみについて各カテゴリーへの言及者比率を算出した。Table 5に25%を超えたものを示す。語り頻

堀田：若者の世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語り

Table 5 世代間格差についての記述上位項目

母親からの語り：		低頻度者		高頻度者	
記述者（総数）：	女子(11)	男子(20)	女子(16)	男子(13)	
	嗜好（音楽等）(36.4)	恋愛・性 (35.0)	恋愛・性 (37.5)	生き方 (30.8)	
	遊び (27.3)	結婚 (25.0)	結婚 (25.0)		
	生き方 (27.3)	生き方 (25.0)			
	結婚 (27.3)				
父親からの語り：		低頻度者		高頻度者	
記述者（総数）：	女子(11)	男子(18)	女子(13)	男子(9)	
	性役割 (45.5)	恋愛・性 (44.4)	仕事・勉強 (53.8)	生き方 (55.6)	
	仕事・勉強 (36.4)	仕事・勉強 (33.3)	恋愛・性 (30.8)		
	家族 (27.3)				
	嗜好（音楽等）(27.3)				

注) 表中括弧内の数字は、記述者総数に対する各カテゴリへの言及者数のパーセンテージ

注) 25%を超えたもののみを列挙した

度による顕著な差というものを見ることは難しいが、いくつか特徴を挙げてみる。まず、女子において母親からの語り頻度が低い場合には、遊びや音楽などについての嗜好に関する記述が多く、上述した、遊びに関する格差感評定は低頻度者でより高いという傾向と一致している。また、全体として女子では性役割に関して格差記述が多かったが、それは父親からの語り頻度が低い者に偏っているようである。恋愛・性について異なるという記述は、女子では母親・父親ともに語り頻度が高い者に多いが、男子では逆に語り頻度が低い者により多い。

次に、話題別に評定された語り頻度と格差感評定との間でスピアマン相関係数を算出した。女子回答者では、父親からの恋愛・性に関する語り頻度が高いとした者ほど家族、結婚、性に関する格差感は低い（それぞれ $r_s = -.26, p < .01$; $-.18, p < .05$; $-.17, p < .05$ ）。また、父親からの遊びに関する語り頻度と友達関係についての格差感 ($r_s = -.20, p < .05$)、父親からの社会についての語り頻度と家族および友達関係についての格差感（それぞれ $r_s = -.17, p < .05$; $-.23, p < .01$ ）との間に弱い負相関が見られた。また、生き方についての格差感は、家族、友人、恋愛・性、社会に関する語り頻度との間にも相関が見られた（それぞれ $r_s = -.20, p < .05$; $-.23, p < .01$; $-.19, p < .05$; $-.18, p < .05$ ）。男子回答者では、母親からの友達関係に関する語り頻度と友達関係についての格差感 ($r_s = -.21, p < .05$)、家族に関する語り頻度と結婚 ($r_s = -.20, p < .05$)、遊びに関する語り頻度と遊びについての格差感 ($r_s = -.18, p < .05$)、仕事・勉強に関する語り頻度と生き方についての格差感 ($r_s = -.19, p < .05$)、それぞれの間に弱い負相関が見られた。父親からとしては、恋愛・性についての語り頻度が高い者ほ

ど、恋愛や遊びに関する格差感が高いという結果となった ($r_s = .22, p < .01$; $r_s = -.20, p < .05$)。

最後に、語りの感想と格差感の関連を見るために、話題別に語りについて尋ねた際に選ばれた感想項目を7つの話題で合計し、それと格差感評定との間でスピアマン相関係数を算出した。その結果、女子で「うっとうしかった」という感想を多く選択した者ほど、性、恋愛、結婚 ($r_s = .16, .20, .16, p < .05$)、家族 ($r_s = .27, p < .001$)、生き方 ($r_s = .16, p < .05$)、仕事 ($r_s = .23, p < .01$)、勉強 ($r_s = .19, p < .05$) に関する格差感が高かった。

以上、母親からの語りは男女ともに3項目において、父親の語りは女子において平均して、その頻度が低いほど、世代間格差感はより大きいという関連性が見られた。話題別に見ると、女子では父親からの語り頻度、男子では母親からの語り頻度が高いほど格差感が低いという関係がいくつか見られた。ただし、男子において父親からの恋愛・性についての語りは、その頻度が高いほど格差感が高いという関係も見られたが、逆に格差に関する具体的記述はより少なかった。語り頻度と格差感との関係は語りの話題、聞き手・語り手の性別によってかなり異なると言える。最後に、女子では、語りに対して「うっとうしかった」という感想が多いと格差感が高いケースが見られた。

考 察

本研究では、若者が親から過去について語りを聞いた経験がどのようなものか、その経験と若者が抱く親世代イメージや世代間格差感との関連はどのようなものかを検討した。

まず、子どもに対する過去についての語りは父親から

よりも母親からが多く、また、聞き手である子どもたちが幼かったときの話が最多で、それ以前に関する語りの頻度はより低い。親からの過去についての語りに対する感想は話題によって異なるが、全体としてはおもしろかった、たいへんだったと思ったなどの感想が多く見られた。

次に、親世代イメージについては、語り頻度に関わらず、若者世代に比べて親世代はよりタフでスローなイメージがより強いとされており、若者は親世代に対して必ずしも negative なイメージを抱いているわけではなかった。バイタリティがあるというイメージは、語り頻度と関連があり、母親からの語りの頻度の高い回答者では、親世代はバイタリティに満ちているというイメージがより強く、父親からの語りについてもその頻度が高い場合には、女子においてバイタリティ因子の得点が高かった。話題別に見ると、恋愛・性、友達関係、社会、仕事などに関する語り頻度とバイタリティ因子の得点との間で正相関を示すものがいくつか見られた。しかし、どの話題が親世代イメージと関連があるのかは回答者の性別、語り手の性別などによって異なり、一定の傾向と言えるものは抽出できなかった。また、語りを聞いた感想として「かわいそうだった」となどの感想とタフな親世代イメージ、「羨ましい」「おもしろかった」などの感想とバイタリティのある親世代イメージが関連しており、語りの感想が共感的・好意的であればより positive な親世代イメージが抱かれていた。逆に「うっとうしかった」などの感想が持たれていると親世代イメージはより negative であり、語りの頻度だけではなく、その語りの感想によってイメージは異なることが示された。

格差感については、母親からの語りは男女ともに結婚、遊び、友達関係において、父親の語りは女子において平均して、その頻度が低いほど世代間格差感はより大きいという関連性が見られた。女子では、語りに対して「うっとうしかった」という感想が多いと格差感が高いケースが見られた。しかし、どの話題に関する語りがどのような点での格差感と関連しているのかを見ていくと、聞き手・語り手の性別によってかなり異なるものであった。ただし、男子における父親による恋愛・性に関する語りと格差感との間以外、語り頻度と格差感との有意な相関はすべて負値であった。

本結果は、親による過去についての語りが、子どもが抱いている親世代のイメージをより positive なものにし、また、話題によっては語り格差感を低減させる可能性を示唆している。たとえば「今の両親しか想像できなかったのも、昔の友達の話などを聞くと、私たちと同じだったんだな」とすぐ実感した（女子）」という感想に典型的に見られるように、聞き手である子どもに

としては、親による過去についての語りが、目の前にいる親とは別の姿を浮かび上がらせ、それが格差感を低減する力を持つと言えよう。

ただし、本研究はあくまで語りと親世代イメージ・格差感との関連性を分析したものであり、これらの因果的関係について結論づけるものではない。たとえば、もともと親世代についてよいイメージを持っていたり、格差感が小さかったので、親が過去について語り、子どももそれに耳を傾ける機会が多いという可能性も考えられることは付記しておく。

本研究では、親子の性別の組み合わせによって、語りの状況および語りと世代イメージや格差感との関連性が異なった。本結果では、父親からよりも母親からの語り頻度が高く、頻度が高い場合にはより positive な親世代イメージが抱かれていたり、結婚などについて世代間格差感が低いという関連性が見られた。本結果では主に頻度における親子の性別による差異を問題としたが、たとえば女性は一般に自己開示傾向が高いとされ（榎本、1987）、頻度だけではなく、語りの深さやそのスタイル（共感を求めるものか、説得を試みるものなど）も聞き手に異なる影響を及ぼしている可能性もあろう。また、語り手としての親の性別だけではなく、子どもの性別は聞き手としての役割遂行にも差異をもたらし、そのことが世代間格差感や世代イメージにおける差異に繋がっているとも考えられる。親子の性別と、語りの状況や世代イメージ・世代間格差の認知に関してさらに詳細な分析を要する。

母親に比べ、父親からの語り頻度はより低かったが、その場合語りがあるとするとそれはある意味より貴重な機会とも言え、1回の語りが世代間格差感や世代イメージに及ぼす影響力は逆により大きいとも考えられる。本研究で、たとえば父親からの語りとして最も多かった仕事・勉強についての語りは、大学生である本研究の回答者にとっては近い将来直面するであろう職業選択に関わるものでもある。父親からの語りを聞くことで子どもはその父親個人のものとしてだけではなく、自らが入っていくようとする社会、特に男性優位社会における年長世代の価値観や行動様式として認識するかも知れない。それは生き方の問題、あるいは特に女子学生にとってはたとえば性役割の問題として捉えられているかもしれない。本研究でも格差に関する記述や話題別語りに関する結果では、父親からの語りと格差感との関連性は女子学生において顕著であり、小野寺(1984)が考察するように、「父親が娘の眼を外界へ開かせる重要な役割(p. 292)」を持ち、父親が社会について話す態度が娘の性役割観に大きな影響を及ぼしているのかもしれない。父親からどのような語りを聞き、それをどのように受け止めるか、それらが職業選択あるいは生き方の選択に与える影響は

堀田：若者の世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語り

検討に値する問題であろう。

本研究で対象とした、親からの過去についての語り、世代に関わる認識を巡っては種々の要因が絡み合っているであろう。Figure 4 はそれらについて整理したものである。これは今後の研究のための一つの枠組みとして表したものであり、ここで示した要因やそれらの関係については今後の検討対象であり、修正されていくべきものである。以下、今度の研究の焦点をいくつか示してみる。

本研究では、聞き手に焦点を当てた。親子間に限らず、過去についての語り聞き手に与える影響について、たとえば戦争体験の語りなどに典型的に見られるように、過去についての情報が今後に生かされるであろうという仮定あるいは期待の下に語りが行われる場合も少なくはないだろう。しかし、実際に、そのような語りを聞くことで聞き手は影響を受けるのか否、受けるとするならばどのような影響であるのか、という問いに関して、心理学、社会学、人類学におけるライフヒストリー研究やライフストーリー研究で具体的に検討したものは比較的少ないように思われる。おそらく、その原因の1つには、過去についての語りに関する従来の研究では、聞き手は研究者自身である場合が多いという理由があるだろう。したがって、記述者あるいは編集者としての語りという視点が多く（たとえば中野, 1995; 井腰, 1995; 小林, 1995）、聞き手としての自己分析という視点はあまりな

い。あるいは、そのことが意識されていたとしても、そのような自己に関わる分析は客観性を持ち中立を維持する「研究」にそぐわないという感が流布してきたことも一因として考えられるのではないだろうか。いずれの理由にせよ、これまであまり分析の対象に上がってこなかった聞き手であるが、たとえば本研究が対象としている親から子への語りという文脈において、聞き手への影響は、親に対する認識、社会や世代についての認識、自己についての認識、さらに、聞き手と語り手の関係性、広く異世代との関係性など、多岐にわたり重要であるだろう。紙幅の関係上、これら全てについて詳述することは不可能であるが、以下いくつか具体的に述べておく。

たとえば、自己についての認識への影響としてどのようなものが考えられるだろうか。本結果では、親からの過去についての語りでも多いのは聞き手が幼い時の話であった。聞き手にとって、このような語りは、断片的な自己の記憶や親以外の人々からの語り、残された写真や当時の物などと相まって、幼少期の自己像を生成・変容させ、聞き手のアイデンティティ形成に影響を与えていると予想できる。また「昔の若者」としての親に関する語りは、聞き手である子どもにとって、現在の自分を評価するための貴重な情報となる場合があるのではないだろうか。現在の自分に関して評価が必要なとき、過去の自己とのいわゆる歴史的比較や同世代の類似した他者との社会的比較とは別に、「昔の若者」は何を感じ、ど

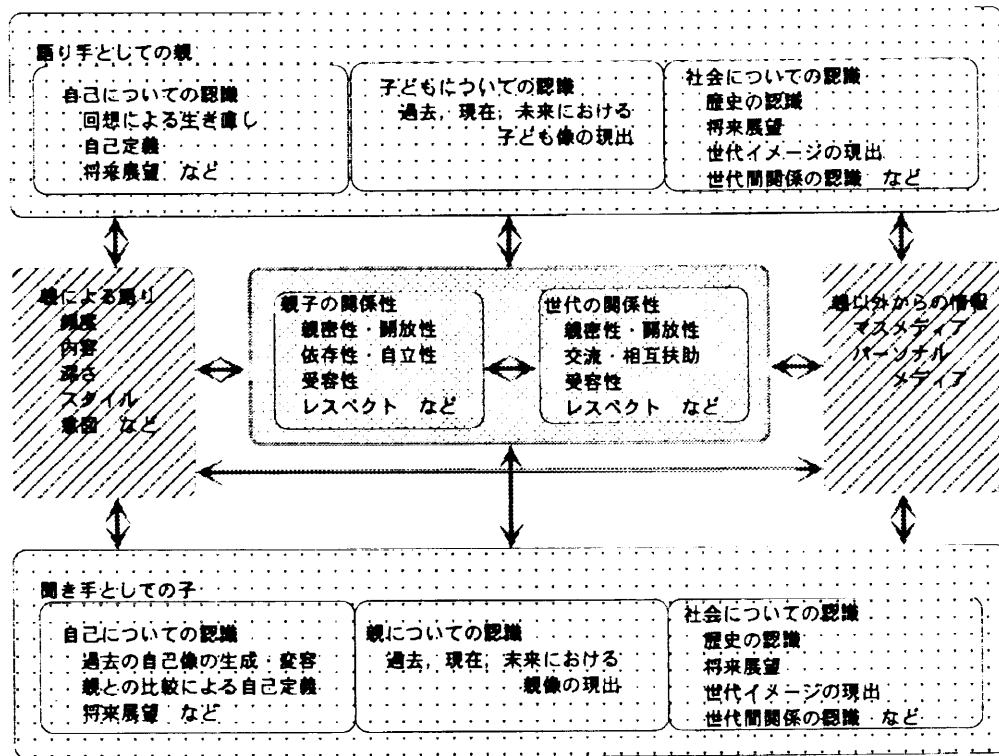


Figure 4 親からの過去について語り、親子間関係、世代間関係を巡る諸要素 研究枠組みとして

うしていたのかを知り、現在の自己と比較することは、若者の自己評価に何らかの影響を及ぼすのではないだろうか。また、仕事、結婚、育児など、まだ同世代は経験していないが、近い将来直面するような問題について、親が昔、自分たちと同じような問題に直面したときに、何を考え、何を感じ、どのような行動をとったのかという情報は若者の将来選択にとっても重要であろう。さらに、親による過去の語りは若者の時間的展望に影響を与える可能性も考え得る。時間的展望とは、現在の状態や行動を過去や未来の出来事と関連づけたり、意味づけたりする働きであり、たとえば未来に向かう時間的展望を獲得することで、自分の目標を見据えた上で現在の行動を調整することが可能となり、またより深い意味で現在の生き方を考える機会を提供してくれるとされている(白井, 1996)。若者の未来に向かう時間的展望は中年期の人に比べてかなり短いことが指摘されている(木下, 1996)。親が昔の若者として過去を語ることで、かつての若者が20年余りの年月を経て現前していることを実感し、そのことが若者の時間的展望の獲得を促進するというようなことがあるかもしれない。

また、親子の関係性は、語りと親世代イメージ・世代間格差感との関係に大きく関わるものであり、今後の研究に組み入れるべき変数であると考えられる。第1に、親からの語りや親子の関係性に与える影響を考えねばならない。「……父と母は自分の経験から得た知識や考え方で一生懸命育ててくれた。でもやはり、両親が育った環境と私のそれでは(多分他の家よりも)かけ離れているので、中、高校生の頃は本当によくぶつかったし、悩んだ。でも、父と母から、育った環境や経験した事を聞き、想像する事で、理解できるようになった。……(女子)」という感想に見られるように、親からの語りや新しい親像を提供し、そのことが親子の関係性に影響を与えたと実感されているケースがあった。これは、小高(1998)が、心理的離乳の過程として挙げる、親に反発を感じ親と距離を置く「離反的な親子関係」から、親を一人の人間として認めかつ親に尊敬・感謝の念を抱く「対等な関係」への発達変化を示すケースと言えるだろう。

逆に、関係性が語りに影響を与える可能性も考えられよう。まず、二者関係が支持的、共感的なものであるか、否定的、敵対的であるかは、語りや成立するか否かに影響する。また、関係性は語りの受け止め方に影響するだろう。本結果でたとえば「一生懸命に勉強をした」「仕事で苦労した」など内容的に類似した語りでも、「尊敬した」という感想が持たれる場合もあれば(「父は今小学校の校長だが、そんなに賢い高校も出てないが、2浪して大学に入り、1年勉強して先生になったそうだ[女子-父親から-たいへんだったと思った、尊敬した]」「母の昔の通知表を見せてもらった。今でもよく勉強する母だからやはり賢いと再確認し

た。専業主婦でいてるのがもったいない[女子-母親から-尊敬した]」など)、自慢話や説教として取られてしまい「うとうしかった」という感想をもたれる場合もあった(「大学に行きたかったけど、金銭的な都合でいけなかったこと[男子-父親から-うとうしかった]」「自分は勉強ができていたとか、公務員試験をラジオで聞いて、早速受けに行ったら、通ったとか自慢たらしく(そして公務員になれという)[女子-母親から-うとうしかった]」。後者の場合にはよりnegativeな親世代イメージが抱かれていたり、格差感がより高かった。それには、実際に語り手がそのような意味を込めていた場合もあるだろうし、また、そうでもなくとも、語り手と聞き手の関係によって聞き手が勝手にそのような意図を推測し、その結果「うとうしかった」という感想を抱いたのかもしれない。たとえ同じ内容の語りでも、両者の関係性が聞き手が抱く感想を左右し、また世代イメージや格差感に異なる影響を与えるであろう。さらに、語りとは語り手と聞き手の相互規定的行為(山本, 2000)あるいは共同行為(やまだ, 2000)であり、語り手と聞き手という2つの主体・主観が存在する相互作用の場であると考えられており(Gergen, 1988)、2者の関係性はそこでの語りやどのような様相で生成・発展していくか、語りの有り様そのものにも影響を与えるだろう。

本研究では、親からの語りという親子間での出来事と、世代イメージや世代間格差感という、社会的カテゴリーとしての世代に関する認識との関連性を検討した。これまでの世代間関係研究では、親子に焦点をあてたものと社会的カテゴリーとして世代に焦点をあてたもの、2つの意味での世代研究が、どちらかという独立に行われてきている。具体的な親子間の相互関係と「世代」一般についての認識がどのように繋がっていくのかについてはあまり検討されていないと言える。たとえば中年期にある人が自分に若者にあたる子どもがいる場合、自分の子どもよりも若者一般に対してよりnegativeなイメージを持つ傾向にあるとされるが(Maassen & de Goede, 1992)、それは単に自分の子どもをよく思いたいという動機からなのか、なぜそのような認知が生じているのかは明らかではない。本研究でも、親からの語りや、語り手である親のイメージにどのように影響を与え、さらにそれが「親世代」一般のイメージや社会での世代間格差の認識にどのように関連するのかについて、また、親子の関係性の変化と世代の関係性の変化がどう対応するのかなど、その橋渡しは不十分であり、それらの解明は今後の課題である。1つには、語り手が自らを世代のメンバーとして自己カテゴリー化して語るか、つまり自らの体験を世代の体験として語るかという点が、聞き手が語りを「世代」一般のものとして認知するか否に関わっていると考えられ、親による語りにおける表現、あるいは、

堀田：若者の世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語り

語り手である親の世代意識などを分析することが考えられよう。

最後に、本研究では、聞き手である若者に焦点を当てたが、語る側である親にとってはどのような影響があるのかに関して多様な研究が可能であろう。語ることで語り手が何をしているのか、語ることの意味を探る研究は心理学においても近年その数は増加傾向を示している。新堂(2000)は、幼年期を回想することは、現在に生きていながら同時にその過去も生きていと感じられることであり、それは「生き直し」であり、その回想のたびにその過去はより深く生き直されると述べ、回想による人間の成長を問題としている。語りに登場するのは「そうであった自己」であったり、「そうなりたかった自己」であったりするが、いずれにせよ、自己像を提供するものであり、それは現在および未来の自己像へと展開する可能性も持つ。過去を語り直すことによって、人生に新しい意味が生成される(やまだ, 2000)。また、自己の過去を語ることによって、目前にいる子は、過去の自分と重なり合ったり、あるいは異質なものとして映ったり、子どもについての認識もまた何らかの影響を受けたものとして浮かび上がるのではないだろうか。親が子どもという聞き手に対して語ることは親自身にどのような影響があるのか、今後の研究課題としては非常に興味深いと言える。

引用文献

- Acock, A. C. & Bengtson, V. L. 1980 Socialization and attribution processes: Actual versus perceived similarity among parents and youth. *Journal of Marriage and the Family*, 42, 501-515.
- 青井和夫 1999 長寿社会を生きる—世代間交流の創造 有斐閣
- Bengtson, V. L. & Kuypers, J. A. 1971 Generational difference and the developmental stake. *Aging and Human Development*, 2, 249-260.
- Bromberg, E. M. 1983 Mother-daughter relationships in later life: The effect of quality of relationship upon mutual aid. *Journal of Gerontological Social Work*, 6, 75-92.
- Coates, J. 1986 Women, men and language: A sociolinguistic account of sex differences in language. London: Longman. (吉田正治訳 1990 女と男と言葉—女性語の社会言語学的研究法— 研究社出版)
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示量とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- 古川正之・秋山登代子 1976 日本人の世代観—国民世論調査「世代観」の結果から— 文研月報 昭和51年7月号, 13-23.
- Gergen, M. M. 1988 Narrative structures in social explanation In C. Antaki (Ed.), *Analyzing everyday explanation: A casebook of methods* (pp. 94-112), London; Sage.
- 堀田美保 1999 若者世代・親世代の損得に関する社会意見の推定 社会心理学研究, 15, 34-46.
- 堀田美保 2000 性役割観に関する若者世代意見と親世代意見の分布認知 心理学研究, 70, 503-509.
- 井腰圭介 1995 記述のレトリック—感動を伴う知識はいかにして生まれるか 中野 卓・桜井 厚 (編) ライフヒストリーの社会学 (pp. 109-136) 弘文堂
- 木下稔子 1996 未来時間の分節 松田文子・調枝孝治・甲村和子・神宮英夫・山崎勝之・平伸 二 (編著) 心理的時間—その広くて深いなぞ (pp. 394-404) 北大路書房
- 小林多寿子 1995 インタビューからライフヒストリーへ—語られた「人生」と構成された「人生」 中野 卓・桜井 厚 (編) ライフヒストリーの社会学 (pp. 43-70) 弘文堂
- 小高 恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- Lynott, P. P. & Roberts, R. E. L. 1997 The developmental stake hypothesis and changing perceptions of intergenerational relations, 1971-1985. *The Gerontologist*, 37, 394-405.
- Maassen, G. H. & de Goede, M. P. M. 1992 Intergenerational and intragenerational perception of adolescents and adults. *International Journal of Adolescence and Youth*, 3, 269-286.
- 中野 卓 1995 歴史的現実の再構成—個人史と社会史 中野 卓・桜井 厚 (編) 「ライフヒストリーの社会学」 (pp. 191-218) 弘文堂
- 西平直喜 1976 世代の断絶は埋められるか 藤原喜悦・西平直喜 (編著) 青年の生活心理 (pp. 9-41) 福村出版
- 小野寺敦子 1984 娘からみた父親の魅力 心理学研究, 55, 289-295.
- Rossi, A. & Rossi, P. 1990 Of human bond-

社会心理学研究 第17巻第2号

- ing. NY: Aldine de Gruyter.
- 新堂粧子 2000 回想の中の幼年期—オクノフィリアとフィロパティズム 亀山佳明・麻生武・矢野智司(編) 野生の教育をめざして—子どもの社会化から超社会化へ (pp. 135-163) 新曜社
- 白井利明 1996 時間的展望とは何か—概念と測定 松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二(編著) 心理的時間—その広くて深いなぞ (pp. 380-394) 北大路書房
- Tajfel, H. & Turner, J.C. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47), CA: Brooks-Cole.
- Thompson, L., Clark, K., & Gunn, Jr. W. 1985 Developmental stage and perceptions of intergenerational continuity. *Journal of Marriage and the Family*, 46, 913-920.
- 徳田安俊 1978 世代差の構造—現実の世代差と認知上の世代差 教育心理, 26, 758-763.
- Troll, L. & Bengtson, V. L. 1978 Generations in the family. In W. Burr, R. Hill, I. Reiss, & I. Nye (Eds.), *Handbook of contemporary theory in family research* (pp. 126-161). NY: The Free Press.
- やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?— 教育心理学年報, 39, 146-161.
- 山本哲司 2000 経験としてのライフ・ヒストリー—「語り」の相互作用と自己 亀山佳明・麻生武・矢野智司(編) 野生の教育をめざして—子どもの社会化から超社会化へ (pp. 244-264) 新曜社
- (2001年1月10日受稿, 2001年11月16日掲載決定)